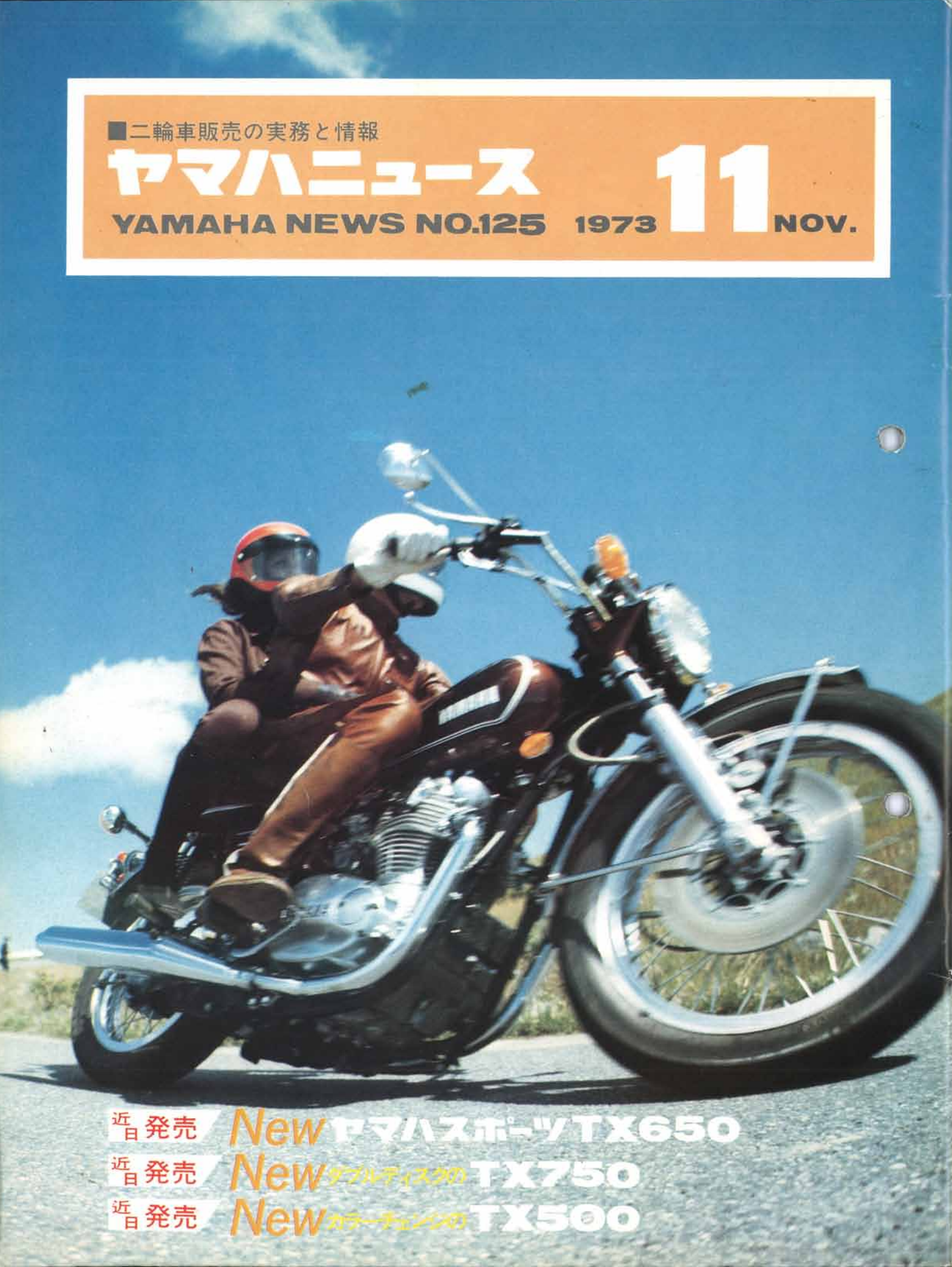
■二輪車販売の実務と情報

ヤマハニュース

YAMAHA NEWS NO.125 1973 11 NOV.



11月のヤマハ

		▶競技会	▶会場	▶主催	▶連絡先
1	木				
2	金				
3	土 文化の日				
4	日	TCMS中部ブロック大会	未定	ヤマハ発動機名古屋支店	052(913)2121
5	月	TCMS四国ブロック大会	トレールランド高松	ヤマハ発動機四国支店	0878(31)1661
6	火	TCMS九州ブロック大会	トレールランド星野	ヤマハ発動機九州支店	092 (41) 3606
7	水				
8	木	TCMS中国ブロック大会	広島県	ヤマハ発動機大阪支店	06 (538) 7331
9	金				
10	土				
11	日				
12	月				
13	火				
14	水				
15	木				
16	金				
17	土				
18	日				
19	月				
20	火				
21	水				
22	木				
23	金 勤労感謝の日				
24	土				
25	日	TCMS関西ブロック大会	和歌山県橋本市	ヤマハ発動機大阪支店	06 (538) 7331
26	月				
27	火				
28	水				
29	木				
30	金				

〔スケジュールは天候その他の事由で変更になることもあります。事前に連絡先にお問合わせください。〕

フレンド店のみなさまへ

変形ハンドル一掃にご協力を！

ご承知のように、最近二輪車の変形ハンドル改造車が増え、これが二輪車事故の重大な原因として大きくクローズアップされています。関係諸官庁においてもこの問題を憂慮し、十月十一日警視庁交通安全指導センターにおいて変形ハンドル改造車の操縦安定性公開試験を行ない、その危険性を公表いたしました。これにより、特にハンドルグリップ位置が不自然なため、乗車姿勢のバランスを失い、このため操作が遅れ、維持が困難となり、制動力、安定性、疲労度等においての危険性が明確に立証されました。

このような結果から、今後変形ハンドルは運輸省令、道路運送車両の保安基準で規制され、道路交通法で罰則を課せられる方向に向かっております。

『二輪車の安全運転は、正しく整備された二輪車で』が基本です。

みなさまのお店でも、この点十分にご留意いただき、このようなお客さまには、いちはやく標準ハンドルに復元し、事故を未然に防ぐようご指導をお願いいたします。

ヤマハ発動機株式会社・営業部長　小宮　功
ヤマハ安全運転推進本部長　上島清介

●ヤマハ発動機株式会社
〒438 静岡県磐田市新貝2500番地 ☎(0538)(2)1111(大代)
●北海道ヤマハ
〒063 札幌市西区24軒1条7丁目35 ☎(011)(641)2711
●仙台支店
〒983 仙台市日の出町3丁目8－36 ☎(0222)(94)6121－6
●東京支店
〒104 東京都中央区銀座8丁目9－13銀座オリエントビル ☎(03)(572)2021
●名古屋支店
〒462 名古屋市北区辻本通2丁目34 ☎(052)(913)2121
●大阪支店
〒550 大阪市西区北堀江通4の27 ☎(06)(538)7331
●四国支店
〒760 高松市松島町3丁目22の9 ☎(0878)(31)1661
●九州支店
〒812 福岡市博多区博多駅中央街8丁目36博多ビル ☎(092)(41)3606
●広島店
〒734 広島市東雲町3丁目16の8 ☎(0822)(82)4111

各地で熱戦つづく
注目のTCMS終盤戦

『TCMS』の愛称で日本中のヤングの間にモトクロスの楽しさ、手軽さを浸透させて二シーズン、『トレール杯争奪モトクロス選手権シリーズ』は、ことしも大きなもりあがりのうちに進展し、終盤戦に突入したいまも各地でブロックチャンピオンを賭けた最後の熱戦がつづいています。

やったー！晴れの'73チャンピオン一番のりを決めた北海道ブロックのエースたち。

全国十一ブロックの'73TCMSは、YGSF出場権を賭けてしのぎをけずった前半戦から、〝TCMSグランプリ〟ともいうべきYGSF大会、そしてブロックチャンピオンをめざしての終盤戦へと、レース数、参加台数ともに昨年を大きくうわまわる充実したシリーズ戦を展開している。

特にこのTCMS戦から巣立った若者たちが、国内のあらゆるモトクロス・イベントではなばなしい活躍を示しているところから、TCMSランキングは、関係者の間で大きな注目を集めている。

ことしもまた、全国のトレールランドからモトクロスの新しい星が、ぞくぞくと誕生し'74シーズンへと大きな飛躍をとげることであろう——。

声援を送る人、カメラをかまえる人、ここ北海道のTCMSは、道産ん子の間に完全に定着した。

ソレーッ！'73シーズン最後のチェッカーめざして。9月25日、全11ブロックのトップを切って北海道ブロック大会が苫小牧市郊外のウトナイ・トレールランドで行なわれた。

ヤ、ヤッ、モトクロスの大御所・鈴木忠男選手もクラブ員をひきつれてTCMSへ。10月7日、フィスコでの関東甲信越ブロック大会で。

ミニトレール、市販車そしてMX、ウデとマシンに合わせてモトクロスを楽しめるTCMSは若い仲間をふやしている。

安全運転テクニックをみがく
長崎県警白バイ隊の「特訓トレール教室」

▲基本トレーニングも終り、インストラクターの伴走で、いざ実地走行へ！

悪質ドライバーにとって、鬼よりこわい長崎県警の白バイ隊が、九月十五、十六の二日間にわたり、ヤマハのインストラクターの指導のもと、雲仙テクニカルセンターで「特訓トレール教室」を開催、安全運転テクニックの向上を図りました。

特訓トレール教室の推進役、松本副隊長によると「不整地でのトレーニングは、つねにニーグリップを忘れない、いざというとき、とっさに中腰姿勢がとれる、など、安全な走行に役立ちます。へんなころびかたはしないようになりますね」。任務中、危険の多い白バイマンにとって、不断のトレーニングが身を守ることにもなるのです。

〝トレール体操開始〟まず、からだのウォーミングアップから。

▶走行前に車の点検「ここを増し締めしなければいけませんね」

〝からだの重心を前に！〟インストラクターによる発進の模範演技▼

▲インストラクターは九州の誇り、MFJ エキスパートジュニアの木下信安選手（中央）と樋口勇二選手（右）

不整地でのスラローム、そしてアクセルターン。▶

▲不整地走行もバッチリ、マスター。白バイ隊の守備範囲もグーンと広がる。

▶ブレーキターンのハイテクニックもたちまち上達。

長崎県警の白バイ隊こと、交通機動巡ら隊がトレール教室を開いたのは今回で二度目。

ことしの一月に行なわれた第一回教室では六人の隊員が参加しましたが、第二回目教室には十三人にふえました。

西島特別指導員、木下インストラクター、樋口インストラクターのコーチのもとで、発進、制動、スラローム走行、アクセルターン、ブレーキターン、ジャンプと、不整地走行の基本を、くり返し、くり返し練習。

走り馴れた舗装路とはちがった感覚に充分なじんだところで、インストラクターを先導に、コースを一周、また一周。下りあり、ギャップあり、バンクカーブありのコースに敢

▲ジャンプに挑戦！勇猛果敢な白バイ魂。

◀激しいトレーニングをおわって〝解散〟の号令。「さあ、明日も頑張るぞ」

然と挑みました。

さすがは、白バイ隊のモサ連。インストラクターも舌を巻く上達ぶりで、たちまちモトクロスのライダー顔まけの不整地走行テクニックをみせるようになりました。

人びとの安全を守る白バイ隊に、一段と威力がましたわけです。

はじめて参加した隊員からも好評で、県警では今後も引きつづきトレール教室を開催していく方針です。

× × ×

開設以来五年の実績を持つ「トレール教室」は、不整地での二輪車の楽しさを引き出してくれるとともに、安全運転の基礎づくりにも役立つと、高い評価を得ています。

ヤマハ販売店のみなさまも、お店のお客さまを対象に「トレール教室」を開催してみませんか。ヤマハがインストラクターを派遣します。

さあ、行こう!!
われらRC-100、新進カーター

最近とみに人気をもりあげているカートレースのメインエベント、ＪＡＦ公認による全日本カート選手権レースシリーズは、当初の六戦から二戦追加され、その第七戦が９月16日、東京・立川市のムサシノサーキットにおいて㈱ＮＡＣ（ナック）主催のもとに行なわれた。

このシリーズ戦と同時に、カートレースの登竜門ともいわれているＪＡＦ公認ＳクラスＮＡＣ杯シリーズの第一戦もスタート。とくにこのＮＡＣ杯にはいわゆるノービスクラス向きのフレッシュマンレースが組まれており人気は上々。来年までに都合六戦が組まれる予定で、もっかタイムスケジュールが検討されているが、いずれもカートは初めてという人が中心のフレッシュマンレースは、全日本なみのホットな意気込みの中にもいかにもフレッシュマンを思わせる明るさ、なごやかさがみられ、いちばんの注目をあつめ、これからのカートレースの発展を荷なう格好のレースとなっていた。

JAF公認

NAC杯シリーズ・フレッシュマンレース

●東京・立川・ムサシノサーキット

▲「用意はいいかい」「ＯＫ、マシンは好調よ」　ぴったりイキのあった清水さん(右)と藤原さん

▲「それじゃ、まかしたぜ」「ウン、無理せずながすヨ」　待望のレースをまじかに、明るい笑顔がいきかう

人気あるRC-100
フレッシュマンクラスで大活躍

ＮＡＣ杯フレッシュマンレースにエントリーした清水盛雄さん（狭山市入間川）は、四輪から転向した新進カーターのひとり。友人の藤原清さんをメカニックに、未来のチャンピオンをめざしている。

「カートの魅力、それは乗ってみればいちばんよく分かりますよ。スピード感は抜群ですし、コーナリングにおけるダイナミックなカーティングの味は、一度ためしてみればよく分かる。それに手軽さ、四輪ではラリーなんかでドカンとやれば100万以上がゼロにもなりますが、カートはせいぜい20万、外国ものでも30万円位ですし、全損なんてことはありっこない。その手軽さが魅力ですよ」

清水さんのカートはＲＣ100。スタンダードそのままのもの。もう少し馴れてからチューニングしたいという。というのも、練習のたびにタイムがあがってきているからだ。このあたりに、四輪で磨いてきたレース・キャリヤがものをいう。

この日のフレッシュマンレースの出走は16台。もちろんエンジンはみんなＭＴ100。いろいろとアイデアをこらしてチューニングされているものの中に、清水さんを含めてＲＣ100は四台。スタンダードそのままでの出走は清水さんひとりだ。

しかし、27秒4のラップタイムを出してスターティング・ポジションは2番手。案外いけるかも――の清水さんに、まだまだ無理は禁物――とメカの藤原さん。清水さんは素直にうなづいて、スタートを待っていた。

またこの日のレースには、静岡のフレンド店・日吉商会さんのひきいる疾風レーシングチームも参加、日吉昇さんはＭＴ100汎用エンジンをもって、エンジン・ランニングに、キャブ調整に大忙しで、一周500メートルのサーキットに展開される熱戦を見守っていた。

▲どこも改造せず、購入そのままのRC-100で疾走するゼッケン⑦清水さん

◀NAC杯Sクラスに東京支店から寄贈されたトロフィ（1～6位）

▶静岡からご苦労さまでした疾風レーシングチームのみなさん

▲和気あいあいのピット。YGSFのカート部門のシャツも見える

ずらりTX
ニューモデルで登場（近日発売）

1．ヤマハスポーツTX750

乗りやすいツインに独自のバイブレス装置を組合わせて“新しいナナハン„の存在を強烈に印象づけたTX750が、ダブル・ディスクで新発売!! ガーリング型油圧ディスク、対向ピストン式の強力ブレーキがフロントにダブルで装着されたのです。飛躍的に向上した制動能力が生みだす高度な安全性と共に、さらにじっくりと練りあげた走行感覚を腕の確かなお客さまにご説明ください。

2．ヤマハスポーツTX650

大排気量車として、気どらず乗れるタウンバイク的な乗りやすさで確固たる市場をもつXS650-Eが、ネオ・クラシックなスタイルをさらに昇華させて新発売となりました。バーチカル・ツインの伝統あるスタイルを基調に、フレーム設計を一新、エンジン支持部を含めて剛性を一段と高めたほか、エンジンはピストン、コンロッドの軽量化を図り、バイブレーションの発生を低減化、また前後サスペンションの減衰特性を改良、アルミH型リム、ニューパターンのタイヤ、テールアップの大型マフラーの採用など、旋回性の向上によるバンク角の増大をはじめ総合的な走行性能を格段に向上させております。電装および関連附属装置についても全面的に改良され、シールドビーム式ヘッドランプをはじめ各灯火類の大型化や大容量バッテリー、ブレーキ関係の警告システムの採用、セルボタン式の始動方式や15ℓ入り燃料タンクなど、いっそうの充実度が図られ、商品価値を高めています。

3．ヤマハスポーツTX500

吹きあがりのシャープなD・OHC 8バルブ、180°クランク一体構造、バイブレスシステムの高性能エンジンを主体に軽快な走行性能をもたせたフレーム設計で着々と市場を拡大しているニューマシンTX-500は、新たに線引きタンクも鮮やかなニューカラーでの登場です。格調高いデザインがさらに冴えています。

New

ヤマハスポーツ TX750

ダブル・ディスクブレーキを装備して、商品魅力をさらに増したTX750。カラーリングは新色コンペティショングリーンとバーガンディワインフレークの2色で、いずれも燃料タンクは白色2本の線引き仕上げです。

◀バーガンディワインフレーク
▼コンペティショングリーン

YAMAHA
OHC 750
YAMAHA

独自の境地

ネオ・クラシック調ヤマハ・ロクハン『TX650』

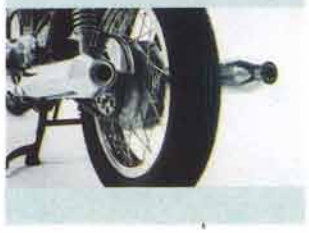
ヤマハスポーツ

New

ヤマハスポーツTX650

数々の充実した装備を施し、装いも新たに登場したTX650。バーチカル・ツインのメカニカルな美しさを基調に、ネオ・クラシック調の伝統あるスタイルに、一段と向上した性能がみごとに結実しています。

ダウンチューブのスリーブを長くとり、エンジン支持部を強化した新設計のフレーム。剛性を高めたスイングアーム。アルミH型リムとニューパターンのタイヤ。減衰特性を改良した前後サスペンション。吸気音、排気音を低減したエヤインテークシステムと大型マフラー。バイブレーションの低減を図ったエンジン。オールガラスのシールドビームヘッドランプ。大型テール、フラッシャーランプ。大容量バッテリー、ボタン式セル始動。1キー・3ロック。新型燃料コック。パネル式メーター、集中パイロットランプ。スイッチ部のコントロールディスプレィ——これは一新したTX650のセールスポイントです。



▲カラー＝シナモンブラウン

主要諸元

全長	2,180mm
全巾	900mm
全高	1,160mm
シート高	800mm
軸間距離	1,435mm
最低地上高	140mm
車輌重量	212kg
最高速度	185km／h
舗装平坦路燃費	30km／ℓ(60km／h)
登坂能力	26°
最小回転半径	2,500mm
0～400加速	13.0秒
制動停止距離	14m(50km／h)
エンジン	OHC 2 気筒前傾並列
総排気量	653cc
内径×行程	75×74mm
圧縮比	8.4：1
最高出力	53PS／7,500rpm
最大トルク	5.5kg-m／6,000rpm
始動方式	セル、キック
点火方式	バッテリー
燃料タンク容量	15ℓ
オイル容量	2.5ℓ
潤滑方式	ウェットサンプ
バッテリー容量	12V14AH
発電機種類	交流発電機
点火プラグ	NGK・B－7ES
キャブレター	三国ソレックスSU型BS38
エヤクリーナー	湿式モルトプレン
一次減速(比)	ギヤ(72／27＝2.666)
二次減速(比)	チェーン(34／17＝2.000)
クラッチ	湿式多板
変速機	常時噛合式5段
変速比1速	32／13＝2.461
変速比2速	27／17＝1.588
変速比3速	26／20＝1.300
変速比4速	23／21＝1.095
変速比5速	22／23＝0.956
フレーム	高張力鋼管ダブルクレードル
キャスター	63°
トレール	115mm
タイヤ寸法(前)	3.50H－19" 4PR
タイヤ寸法(後)	4.00H－18" 4PR
ブレーキ(前)	ガーリング型油圧ディスク
ブレーキ(後)	機械式ドラム
前輪支持	テレスコピックオレオ
後輪支持	スイングアームオレオ
ヘッドランプ	シールドビーム12V50／40W
テール／ストップ	12V8／23W
フラッシャーランプ	12V27W
各種パイロットランプ	12V3W

New

ヤマハスポーツ TX500

線引き燃料タンクがひときわ印象的なニューTX500。カラーはブランディレッドとハイフレークブラウンの2色で新発売です。持ち味ユニークな軽快な走行性能を一段と目立たせずにおかない装いがポイントです。

ハイフレークブラウン▶
ブランディレッド▼

FIM杯125cc.ccモトクロス決勝大会

都良夫，堂々の2位入賞!!

初代FIM杯125ccモトクロスチャンピオンを決定する決勝大会は、九月二十三日、ユーゴスラビアのザボックで行なわれたが、この大会にYZM125を駆って出場したAグループチャンピオンの鈴木都良夫（遠州ライダース）は、第一ヒート三位、第二ヒート一位で、みごと二位入賞を果した。

★★★★★★★

この決勝大会は、今シーズン前半A、B両グループに分けて行なわれていたシリーズ戦から各上位十五名、計三〇名のライダーが参加して行なわれたもの。

日本を代表してAグループに参加し、みごとチャンピオンとなってこの大会に臨んだ鈴木都良夫は、初代FIM杯チャンピオン候補の最右翼と目されていたものであった。

ツンダップコンビに単騎・都良夫の大健闘

コースは、谷間につくられたアップ・ダウンの多いもので、ちょっとのチェンジミスで登れなくなるような急坂が二ヵ所もある。

第一ヒート、十五～十六位から追い上げを開始した都良夫は、終盤二位をいくF・シュナイダー（ツンダップ・西独）を抜いて、トップのA・モレルバー（ツンダップ・仏）に肉迫したが、残り二周の時、惜しくも急坂入口でスピン、シュナイダーについで三位におわった。

しかし、第二ヒートでは、中盤からトップにおどり出ると、以後は快走につぐ快走をつづけ、二位のモレルバーに三〇秒近い大差をつけて圧勝。

しかしながら、第一ヒートで一、二位を占めたツンダップコンビは、第二ヒートでスタート悪く遅れていたモレルバーと、二位を確保していたシュナイダーを入れかえてモレルバー二位。この結果、総合成績では、惜しくも二ポイントの差で、モレルバーの優勝、都良夫二位となってしまったものだ。

それにしても、第二ヒートの完勝はもとより、第一ヒートの都良夫の猛追、特に下り坂でのはげしい走りは、ヨーロッパのモトクロスファンに大きな衝撃を与え、都良夫とYZMつよしの感を強烈に印象づけたものであった。

なお、このFIM杯125ccモトクロスは、来年度もGPではなく、ポイントのみGPに準じ12レースにわたって行なわれる予定だ。

こんにちは——
ヤマハ
——です

3代目でさらに飛躍

—夜の戸別訪問でアタック—

新潟市寺山1-153 ●長島輪店さん

長島家、勢揃い。後列左から、当店三代目の長島富次郎さん、ションさん、四代目のヨシノさんに秀男さん。前列は当店五代目となる予定の由雄君と恵子ちゃんです。

新潟名物のササダンゴを前に、自転車の神さまといわれる富次郎さんご夫妻。人情味あふれる暖かいご夫婦です。

新潟といえば文字通りの米どころ。時節はちょうど新米のとき。コシヒカリのあの銀色の輝きと香りを、味わっておいでのご家庭も多いことでしょう。

新潟市の発展は、新潟港と切っても切れない関係にある、といわれます。もともと米の積み出し港としてにぎわった新潟港は、やがて裏日本を代表する重要な貿易港として発展し、この港を背景に、新潟市も大きな商業都市として発展したのです。

日本の屋根といわれるアルプスの彼方、雪深い新潟も、今や東京から四時間の近さ。列島改造の波に乗って、いよいよにぎやかに、いよいよ華やかに発展する気配がいっぱいです。

今月はこの新潟市で、明治以来お店を開業現在三代目の時代を迎えてさらに飛躍発展、一家が一つの心で支える、明るい長島輪店さんをお訪ねしました。

当店は三代目 明治時代から営業してます

国道からちょっと引っこんだ、通りに面したお店。お訪ねした日が雨だったせいか、人通りもなく、たいへん静かです。

店内右手の部屋に丸テーブルが置いてあって、ちょうど長島富次郎さんがお茶を飲んでいるところでした。

富次郎さん（55才）は当店の二代目。いまは長男の秀男さんに店主の座をゆずりましたが、まだまだ隠居どころではありません。町内でも〝自転車の神様〟と鳴りとどろいているだけあって、自転車への執念は若者たちと同じです。

若主人がオートバイ・軽四輪部門をさばくかたわら、富次郎さんは自転車部門を一手にひきうけ、〝自転車の達人〟を慕ってくるお客さまの、信頼に応えていらしゃいます。

長島輪店さんの創立は、はるかイニシエの明治時代とか。当時は、オートバイはもちろん、自転車もそう普及している筈もありませんから、「何か鍛治やみたいなことやってたんじゃないかな」ということです。

自転車らしきものが始めて世界に現われたのは一八世紀末。やがて一八八八年（明治二〇年）にイギリスのダンロップが、空気入りタイヤを発明して、現在のような自転車が完成されたといわれます。

日本にはじめて自転車が渡来したのは明治三年。やがて明治二四年には、わが国でも生産されるようになりました。しかし、この雪深い新潟に自転車が走り始めたのは、もっと遅かったにちがいありません。

長島輪店二代目の富次郎さんは明治四十二年の生まれ。当時の業界、当時のお店の状況は知るよしもありません。

古い役所の帳簿によると、大正五年には〝長島輪店〟が登録されており、この頃から時代の先端をゆく自転車等を扱って、人びとの目を見はらせていたらしいことが、おぼろげに推測されます。

まだまだ隠居できません。お客さまにこう慕われちゃ……パンク修理をなさる富次郎さん

帳簿、清掃、接客と、お店の大きな戦力を荷なうヨシノさん。快活なすてきなお人柄です。

やがて、大正を経て昭和に入ると、時代はいよいよ富次郎さんのもの。小学生の頃から自転車狂として界隈に勇名を馳せ、やがて初代辰四郎さんの跡をうけて長島輪店を継ぐと、界隈知らぬ人もない〝自転車の神様〟として慕われるようになったのです。

そしていま、時代は移り変わってオートバイが扱い商品に加わり、店主も三代目、秀男さんになりました。現在では軽四輪も加えて、文字通り〝輪店〟の名にふさわしく、クルマと名のつく商品をじょじょに網羅しています。

自転車からオートバイ、オートバイから軽四輪へとお客さまのシステム化もはかって、ご商売もいよいよ安定、さらに飛躍のときを迎えようとしています。

〝昔は商売やりよかった！〟

「そう、昔と今じゃ商売も違いますねェ。昔の方がズーッとやりよかった。人情がありましたよねェ」

そう昔を述懐するのは、ション夫人。ションさんは、れっきとした名前が〝ジョン〟というのに、いつの間にかダク点がとれてしまって、〝ション〟になってしまったとか。ションさんは、助産婦さんの資格をもち、これまで万と数える赤ちゃんをとりあげてきましたが、今は隠居しています。

さて、いずこも同じ、ここ新潟市でも、世代の交代によって、昔ながらの商法に変化が生じているようです。商品は二の次、●店とお店の主についていたお客さんも、最近は気ムラで流動的です。

「昔はね、うちがこれを買えといったら、お客さんはもういうなりでしたね。どんな家でも先祖代々、親がうちなら息子もうちへ買いにくる、そういう時代でしたよ。いまは商売がやりにくくなりました」富次郎さんも、そうおっしゃいます。

店に面した道路は、昔は国道だったよし。それがいつか県道となり、今では市道となりました。県外から流入する人口はドッと増え、この界隈も新興住宅地として見知らぬ人びとが急激に増加しています。それだけ市場は拡大し、需要は増加した、といえましょうが、さりとて、その人びとが全て、当店のお客になってくれるとは限りません。

新しい時代の波が、否応なしに長島輪店さんを押し流し、新しい時代、新しい人びと、新しい人情に沿って、商法もまた変化せざるを得ないのです。

「こういう時代ですからねェ、やっぱりおじいちゃんより、お父ちゃんの方が、よう商売してるようです」

ションさんが、そうおっしゃいました。

戸別訪問で巻きかえし

さて、固定客がたくさんあって、それだけで商売が十分成り立っていた〝よき時代〟はいまは昔。競争も激しく、お客さんの心も摑みにくい現在では、座してお客を待つ〝座売

国道から県道、そして今は市道となった通りに面して、時代の変化を生き抜いてきた長島輪店さん。

り商法が、通用しなくなりました。

不断の積極的な営業活動が必要なのです。そして、情報時代といわれるように、いち早く、自店の商品をお客さまに知らせ、またお客さまの願望をいち早くキャッチすることが大切です。

PRやクラブの結成、催しものや講習会など、各地のお店が行なっている諸活動は、情報を洩れなく早く流し、その結果をいかにたぐり寄せるか、という努力の現われに他なりません。

当長島輪店さんも、新しい三代目の店主さんを迎えて、こうした近代商法に脱皮しようとしています。

いえ、脱皮しようがしまいが、時代の流れは、昔かたぎの商法を受けつけなくなっているのです。

この時代の流れを身体で知っている三代目秀男さんは、お父さんの富次郎さんと違って積極的な営業活動を行なっています。

その最たるものは、何といっても個別訪問。友人、知人の紹介、あるいは買っていただいたお客さまの紹介をもらって、目ざす本人が在宅しそうな夜の時間に訪問セールスをするのです。ことに、国道が新らしく敷設され、交通の流れがそちらにとられてからは、この個別訪問は、長島輪店さんの、最大の武器となっています。

別して顧客リストをつくってはいませんが「商売をしていたら、お客さんのリストは細大洩らさず頭の中に入っていますよ」と秀男さんはおっしゃいました。

購買力をがっちりシステム化

秀男さんの夢は、もちろんお店を拡充すること。まず現在の店舗をショールームにして自転車、オートバイ、軽四輪を展示し、〝あそこにいけば何でも見られる〟という乗りもの専門店になること。そして自転車のお客さんにオートバイを、オートバイのお客さんに軽四輪を買っていただけるよう、お客さまの購買力をシステム化することです。

ここ長島輪店さんにとっては、自転車、オートバイ、軽四輪と三種類ある商品は、そのどれも単独では価値を発揮できません。自転車はオートバイへの、そしてオートバイは軽四輪販売の、重要なステップなのです。

しかも、オートバイの持つ、あのさわやかな乗り心地を一度味わった人は、四輪に乗っていても、もう一度オートバイを買ってくれるそうです。

車の渋滞、駐車場難などなど、四輪の世界も厳しくなる一方の現在、オートバイの利便さが、ここ新潟でも見直されてきています。

各種商品のお客さまを、一つの流れの中でとらえようとしている長島輪店さんにとって、人の好み、時代の流れの変化は、そう恐るるに足りません。

明治、大正、昭和と、三代を生き抜いてきた長島輪店さんは、こうした手がたい経営法で、これからもさらに大きく発展していくことでしょう。

女ひとり 免許をとって3ヵ月 ヨーロッパ走りある記

2

ヘルシンキで一番といわれているアーウィドソン社。大通りに面していて、二つの入口を左右においてきれいなショーウィドウがある

佐納 たかこ

北欧にむけて出発する前に、オランダ・アムステルダムでいろいろと散策していたときに気づいたことですけれど、さすがオートバイについては、市内の至るところで「YAMAHA」を見かけ、〝サスガーッ〟と思いました。ロッテルダムに足をのばして、セリングモーターに立寄ったときの話では、大型だけで年間七〇〇台をらくに売っているということでした。若者に人気のあるオートバイはやはり市場性のつよい商品です。

ヘルシンキのガイドを兼ね、フィンランドのオートバイ事情を語ってくれたアーウィドソン社のセールスマネージャーMr.フレデリックソン

◀のどかなヘルシンキの朝市風景

むずかしい大型免許でもヤングは大型志向

さて、いろいろと新しい経験を重ねながらヘルシンキ（フィンランド）についた私は、さっそくヤマハの輸入元、アーウィドソン社に足を運びました。

この社でのオートバイ取扱い量は年間二五〇〇台を越えるとかで、だんぜん他社を圧し抜群の成績をあげているといいます。この売上げの中心をなしているのはもちろんヤマハです。その内訳は125ccが40％、80ccが20％、250ccが15％ぐらいで、他社製品はパーセンテージの中に入れ得ないほど少数とのこと。

小型のものが圧倒的に多いのは、大半が実用車として街中を走るのに使うためと、125ccまでの小型なら簡単にとれるライセンスも、大型となると日本と同様に試験が非常にむずかしくなるためです。それにもう一つ、ここでも大型マシンへの人気は圧倒的にヤングにあるため、経済的な理由がもっとも大きく影響しているといわれています。

ちなみに、オートバイファンのすいぜんの的となっているTX750が、現在八四六〇FM（フィニッシュ・マルク）なのにくらべ、フィアット600（800cc四輪乗用・イタリア製）が八〇〇〇FM。そうなれば、どんなにTX750が欲しくとも、二人乗りで、しかも荷物が積めて雨やウインターシーズンにつよい四輪のほうについ手が出るのは止むを得ないことです。なにしろ、こちらの冬はとても長くて雪や氷に閉ざされがちなのですから。

なお、いわせていただければ大型車に対する税金の高さに関連して、車でさえここではフォルクスワーゲン1300クラスの小型車に人気が集中しているというのです。オランダやドイツで、750ccクラスに乗った沢山の若者に出会ったのにくらべ、少々さびしくはありますけれど、ま、いいでしょう。

オートバイであれば通行可 一二〇km／時のモーターウェイ

また、こちらでは125ccはもちろん、スクーターやモペットを除いて、とにかくモーターサイクルと名のつくものならモーターウェイ（アメリカ流にいうならハイウェイ）を走れるわけだし、ちょうど今年の七月から新しく施行された法令によるスピードリミットはオートバイに対して一二〇キロ／時と、日本とは比較にならないほどゆとりがあるのです。

たとえ、形は小さくとも高速の能力さえあれば堂々とモーターウェイ、日本の東名や名神高速道を走れるのです。本当にうらやましい!!かぎりですね。

いろいろと事情はあるにしても、わずか二日間のヘルシンキ滞在中に、どんなに沢山のYAMAHAを見たことか。こうしているときにも、ホテルの窓越しに六～七台のオートバイがさっそうと走っていきました。四台までYAMAHAです。

みんな揃いの黒いツナギに、ライトブルーのヘルメット、そしてヘルメットと燃料タンクの色を一緒にしています。それぞれ、荷物をなんにも積んでいないところをみると、ヘルシンキ市内か、それとも近郊の若者たちかもしれません。

私がヘルシンキですっかりお世話になったミスター・フレデリックソンの説明によると日本と同様にこちらにもカミナリ族なる名称があるとか。ただし、日本で意味するのと同じな

◀冬はこのようなスパイク付タイヤで走るんですよ——と、独特のスノータイヤを見せてくれた6日間トライアルの選手のひとりMr.ハイトヘリン

のかどうかは分かりません。なにしろモーターサイクルであれば、時速一二〇キロのモーターウェイに乗り入れられるお国のことですから。

小さなトラブルは みんなユーザー自前で修理

日本でも大のオートバイファンなら同じことでしょうけれど、少々のトラブルならみんな自分のウデで片づけてしまう、とも聞きました。したがって、アーウイドソン社のワークスショップへまわってくるのは、たいていは手持ちの工具では間に合わない大きな故障だけといいます。

でしょうとも、オランダはヘンゲロの街中で私のRD350のプラグを交換してくれた好青年も、中古のものを一度分解して自分で組立てたものに現在乗っているといっていたのですから。どこにでも熱心なマシン・ファンはいるものです。

それと、オートバイなる乗りもの、私のつたない経験からもいえることですが、乗りはじめるとどうしても自分で機械をいじってみたくなるもののようです。

もちろん、いまの私がいったん機械を分解すれば二度と組上がらないこと受け合いですから、けっして、けっしてそんな大それたことは考えられないし、第一ヨーロッパにはYAMAHAを扱っているディストリビューター、ディーラー、エトセトラはそれこそごまんとあるのですから、なまじ妙な気持ちを起す前に、さっさとワークスショップに駆けこんだほうがずっと利口というものです。

実のところ、アムステルダムに着いてヨーロッパ各国のヤマハ取扱店リストをもらうまでは、〝まさか！こんなにまでは——〟と思っていたのですが、それはもうすごいものです。だからこそ、YAMAHAを多く見かけるのでしょうが、いかに商売とはいえここまでくるには大変なご苦労があったことでしょうと、つくづく思ったことでした。

のんびりモーターウェイを歩くのはトナカイにあらず鹿でした

対向車の気配さらになし。二車線モーターウェイ。

アベック・ライダーと交歓 ユースホステル初泊り

アーウイドソン社のワークスショップで各部の点検をうけた私のRD350は、好調そのもの。次の訪問国スウェーデンに向けて出発したのは二日後のことです。

途中のポリまでは、片側一車線、ただセンターラインがあるだけのモーターウェイですけれど、時によっては何分間に一度対向車に出合うだけということもあって、道路を借りきっているという感じ。天気は良いし、干し草のニオイを胸いっぱい吸込んで、ウトウト眠くなってしまいそう。

不謹慎というべきか、まだ全走行四〇〇〇キロ余りの未熟者だというのに生意気ナ！でも、本当に歌でも歌っていなければ、すぐに居眠りがはじまっちゃうようなウララかさです。行けども行けども、牛を放し飼いした牧草地と、針葉樹と、湖と……。

この日の目的地、ポリへのちょうど中間ぐらいまできたころ、遙か前方を走っていた二人乗りのオートバイに追いつき、ホーンを鳴らして合図をしてから彼等の左側に並んで、〝ハロー!!〟と声をかけたら、青い目の男の子が〝お先にどうぞ〟って合図をするので、〝では失礼！〟と先にでたら変なの！

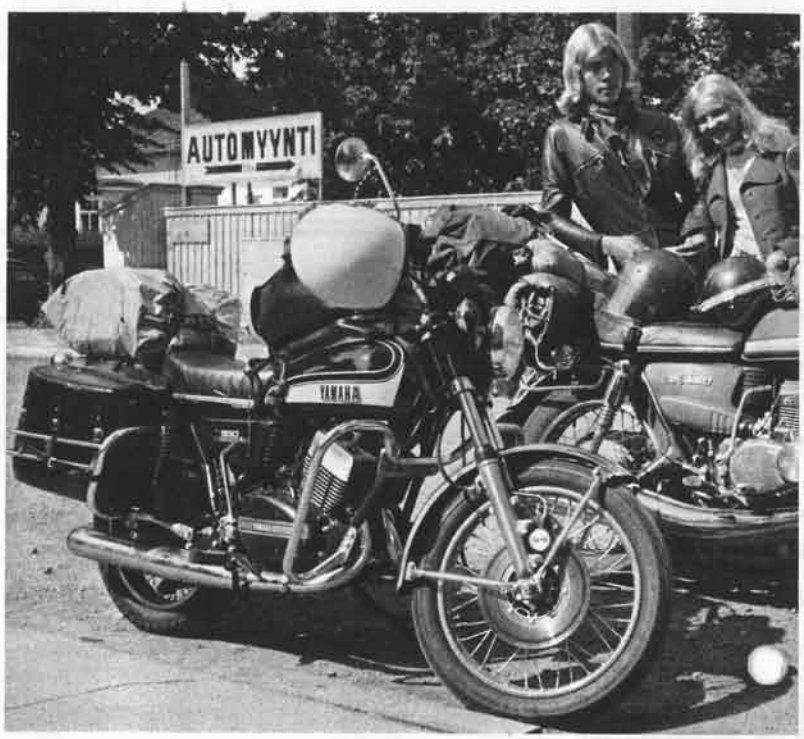
私が八〇キロ／時で走れば相手も速度をゆるめるし、一二〇キロ／時で走ればスピードをあげて追っかけてきて、ずっと等間隔でついてくる彼等がバックミラーに映っていてなんとなく落ち着かない感じ。

こんなことで、ポリの街の入口で路肩にマシンを止めてライダー交歓。彼等は十八才の少年？と、十四才の少女で、少女の家のコテージに行くところとか。

時計を見ると二時を少しまわったところだし、もう少し距離をかせごうとすると、彼は〝絶対にポリに一泊すべきだ。ボクたちが案内するから〟と、私の弟や妹にしても少々若すぎる彼等の親切なこと。結局は、この夜はユースホステル泊りの初体験となりました。

ナイ、ナイ、ナイ。ヨウ、ヨウ、ヨウ。

◀モーターウェイまでエスコートしてくれたお二人さん



ポリのユースホステルで交歓した
オジイちゃんとオバアちゃん

ヘルシンキからポリへの途中で仲良しと
なった18才と14才のアベック・ライダー

ユースホステルはフィンランドの田舎から出てきた六十過ぎのオバアチャマと同宿。当然のことながら、彼女たち英語なんかしゃべれるはずもなく、ただ「ヨウ、ヨウ、ヨウ！」「ナイ、ナイ」（ヨウはイエス、ナイはノー）をやたら連発して、また親切の押し売り。キャンディをくれたり、オレンジをくれたり。それでこちらはお礼に鶴三羽を折って、あとはグッスリ。

翌朝、早くからおしゃべりに興じる彼女たちに否応なく起されたおかげで早立ちです。

でも、その前に二大難関。彼女たちの胸の中につよく抱きしめられて窒息しそうな別れのあいさつ。その次にオートバイに荷物をしばりつける私をグルリとりかこんではなれないオジイちゃん、オバァちゃんたちをいかに追っぱらうか……。

結局これは不成功で、みんなに盛大に見守られながら砂利の上を危っかしく方向転換。このときまたまたオジィちゃん、オバァちゃんがガヤガヤ騒ぎたてて〝ヨウ、ヨウ、ヨウ!!〟。私はユースホステルの門のところでデコボコに乗りあげスッテンコロリン。またやっちゃいました。荷物のうしろに日の丸なんかつけちゃって、これが男なら〝日本男児の名折れ〟ってところ。ゴメンナサイ。

でも、再びはじまった干し草のニオイと快い晴天に、転んだことなどすっかり忘れて一路北上、バーサへ。ここでも、ちょうど通りかかった二人乗りのライダーに助けられてモータウェイまでエスコート。本当にみんな親切!! 人間万才、オートバイ万才です。

だけれどもバーサからルレアの道ときたら十七キロも工事中による砂利道。腰を浮かして運転するなんて技量はないから、シートにもう身体中がガタガタ。

止むなく、国境を目前にした小さな教会のある村のモーテルに一泊することになりました。でも、あしたはいよいよスウェーデン入りです。それに、ここまで北上してくると日没が午後十一時過ぎ。そして夜明けが午前一一時過ぎという、そう、白夜が楽しめるってわけです。どうってことはないのですけれどやっぱり眠れない夜でした。

人間万才、オートバイまた万才

翌朝、重い頭で再び愛車RD350にまたがり国境の街トルニオへ。

ここで、フィンランドとのお別れに……ということで、絵ハガキを買ってカフェテリアで昼食のあと、絵ハガキにペンを走らせていたら、〝ハロー!!〟って威勢のいい若者の声がして、私の前の席へドカッと腰をおろした男の子。なんとマアー!、ポリで案内してくれたガールフレンドとの二人乗りのセッポ君ではないですか。

どうりで、ポリで私の行動を根掘り葉掘り聞くと思ったら、やっぱりでした。

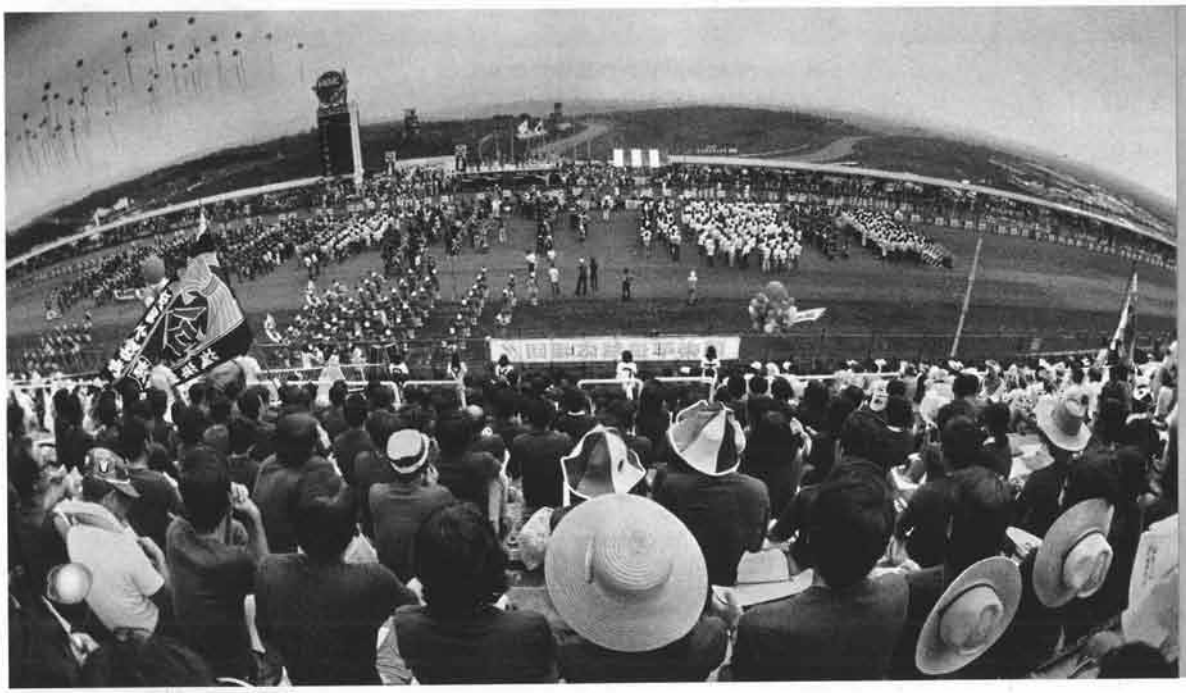
それにつけても、黒いツナギのファスナーをお腹のところまで開けた彼の青白い胸に生々しくついている赤い傷アトは?……。ああ見ちゃいられない!! 凄いキスマーク。彼女のほうは14才だっていうのに。

でも、ひょっとして、これはたんなるゼネレーションの相違かしら? まったくギャフン!!だワ。これから行くのはスウェーデン。行く先が思いやられます。でも、人間万才、オートバイまた万才の旅です。（つづく）

がとうございました!!

コンテスト入選者発表

ルム株式会社の厳正なる審査の結果、次の方々がみごと賞典を得ましたので、ここにご案内いたします（敬称略）。　なお規定のヤマハ賞および富士フィルム賞はご本人さまあてに直送いたしました。ご応募いただきましたみなさまに重ねてお礼申しあげます。



◀推せん
「入場式風景」静岡県富士市中島154―2　赤堀実信

カラー写真の部

特　選　「アクセル全開」東京都中野区本町５－48－15　安藤道雄

特　選　「ジャンプ」静岡県浜北市寺島2256－２　小栗征雄

特　選　「オッとあぶない」静岡県浜北市貴布禰1288　和田正秀

特　選　「ヤマハミニと女」静岡県沼津市今沢400－19　古屋雅堅

特　選　「ＹＧＳＦにて」静岡県沼津市今沢188　加藤篤

準特選　「デッドヒート」池田浩一朗、「トライアル」川本秀勝、「青春」「スタート」小林宏、「ポーズ」山本善彦、「誰もいねえや」平山雅彦、「親子相乗り」塩沢勇、「オットットー後輪走行」常田憲次、「若い二人」佐藤芳雄、「ポートレート」松島進

入　選　「チャピィは私の恋人」下元永一、「追いつけ追いこせ」「ハイクリーンです」平山雅彦、「いい線いってたがナ残念」常田憲次、「ゴールイン」「ソーレ来るるゾ」「モトクロスコース」和田正秀、「妙技の競演」「人車一体」「快走!!高井選手」小栗征雄、「応援」小林宏、「栄光めざして」小林稔、「地元の選手に声援を送る応援団」赤堀実信、「ジッピィと並ぶ」小林孝、「接戦」菅谷幹彦、「アトラクション寸景」石原巌「ＹＧＳＦにて」加藤篤、「独走」池田定平、「素晴しいヤマハミニ」古屋雅堅、「曲乗り」浅羽和明

佳　作　「逃げろや逃げろ」成沢道博、「無題」北山操、「うしろが気にかかります」福田邦男、「夏と女とレジャーバイクZippy」石川静夫、「GPマシン」安藤道雄、「ひと休み」「ゴミ？いやオートバイです」「リモコンライダー」松原宏吉、「３位まで」「オットット！」「㊙新製品登場」平山雅彦、「トライアル教室のミック」夏目三男、「ポートレート」「記念写真」中村正男、「チャピィに乗る」大橋佐吉、「すてきだわよ」「さて次をどうしようか」山本善彦、「チャピィと女」「ジッピィと女」大橋佐吉、「デッドヒート」「モトクロスの妙技」小栗征雄、「チョットお乗りになりませんコト」藤本和男、「ヤッタ」「スタンド風景」和田正秀、「ミージッピィよ」小林孝、「ゴールイン」小林宏、「世界一の男」小林稔、「仲良し」松島進、「お母さんもいっしょに」佐藤芳雄、「堂どおたる入場式」赤堀実信

たくさんのご応募あり

第2回YGSF（ヤマハグランドスポーツフェスティバル）記念フォト

富士スピードウェイに延べ9万5000人におよぶ若人たちをあつめて盛大に行なわれたこの夏最大のスポーツイベント「第2回ヤマハグランドスポーツフェスティバル」を記念して行なわれましたフォトコンテストは、おかげさまでたいへんな人気を呼び、予想をはるかにうわまわるご応募をいただきました。ヤマハ発動機株式会社および協賛の富士写真フィ

▶推せん「着地」静岡県浜北市寺島2256—2 小栗征雄

白黒写真の部

特　選　「混戦」静岡市丸子1736—6　池田定平

特　選　「混戦」静岡県浜北市本沢合219　伊吹政男

特　選　「デッドヒート」静岡県焼津市中里724—1　松永秀樹

特　選　「アクシデント」東京都大田区下丸子4—19—17　倉沢勝治

特　選　「セニアのコーナリング」神奈川県藤沢市片瀬海岸3-16-9 岩上和興

準特選　「モトクロス」能登切哲夫、「接戦」川本秀勝、「ロードレース」「トライアル」田中秀治、「ジャンプ」竹内錦司、「独走」「激戦」岡部儀一、「悪路を乗り切る」小栗征雄、「ロードレース」伊吹政男、「デッドヒート」佐々木実、

入　選　「ロードレース」田中秀治、「接戦」「富士に集結」倉沢勝治、「あるモトクロッサー」「トップ争い」松永秀樹、「ジャンプ」伊吹政男、「闘い終って」佐々木実、「スタート直後」「いざジャンプ」「着地するキーズ選手」「空を切る」小栗征雄、「外人ライダー」「デッドヒート」岩上和興、「走れモトクロス」竹内錦司、「Chappy」「モトクロス」石田優司、「Yスペシャルの力走」黒部寿雄、「モノクロスサスペンション車を駆る瀬尾」「独走世界の金谷」岡部儀一

佳　作　「デッドヒート」「追いあげる河崎裕之選手」「力走！高井幾次郎選手」「ジャンプの争い」「ゴールを目指す金谷選手」「キーズ選手のジャンプスタイル」「正確なライディング」「力走する三室選手」「着地」「ヘアピンカーブを抜けて」「ヘアピン付近」以上小栗征雄、「セニア」「世界の金谷」「レースを前に」岩上和興、「何をしてるんですか」池谷清和、「ロードレース」7点田中秀治、「ゴーカート」川本秀勝、「攻防戦」池田定平、「Zippy」「モトクロス」石田優司、「ボートレート」鈴木利行、「デッドヒート」伊吹政男、「プラクティス最終ラップ」夏目三男、「着地の瞬間」岡部儀一

〈白黒写真の部〉

特選「混戦」
静岡市・池田定平

特選「混戦」
浜北市・伊吹政男

特選「デッドヒート」
焼津市・松永秀樹

特選「アクシデント」
東京都・倉沢勝治

特選「セニアのコーナリング」
藤沢市・岩上和興

〈カラー写真の部〉

特選「アクセル全開」
東京都・安藤道雄

特選「ジャンプ」
浜北市・小栗征雄

特選「オットあぶない」
浜北市・和田正秀

特選「ヤマハミニと女」
沼津市・古屋雅堅

特選「YGSFにて」
沼津市・加藤　篤

ヤマハ YAMAHA

ゆたかな商品群

陸に、水に、雪に楽しいスポーツレジャーを生み、精力的に働くヤマハ、YAMAHA。みなさまおなじみの、あるいは初めてのヤマハをここにご紹介します。お客さまとのお話のネタとしてどうぞご利用ください。

ついに登場!!
世界第一級のロードレーサー
プジョーサイクル・スーパーPX10E

現金標準価格 ￥250,000

さきにご案内いたしましたように、ヤマハ発動機株式会社ではフランス最大の自転車メーカー、サイクルプジョー社との間に同社製品の日本国内における販売総代理店契約を結び、各種のサイクルプジョー社製自転車の販売を行なってまいりましたが、このほどサイクルプジョー社製最高峰の技術製品といえるロードレーサーの最高級車「スーパーPX10E」の発売を手がけることになりました。

この「スーパーPX10E」は、国際ロードレースにおいて幾多の優勝実績と長年の研究成果を背景として生みだされたもので文字どおりロードレーサーの最高水準を示すものとして高い評価を得ているものです。

ロードレーサーとは説明するまでもなく競技用自転車であり、脚力をいかに効率高く自転車の走力に変えるか、またその走力がいかに無駄なく加速につながるかが生命とされているものです。そこで、この「スーパーPX10E」には各種の軽合金を使用して極限まで車体重量を軽量化し、高度に設計された前後ギヤの配合をはじめタイヤ、変速装置、ブレーキなど、各種部品はすべて世界の第一級にランクされる名実ともに最高級の著名パーツを使用して構成されています。まさにロードレースのヤマハにふさわしい理想のサイクルロードレーサーです。

どうぞ、お店でもプジョーサイクルをご検討ください。

■レイノルズ製531フルセットダブルバデットチューブのフレーム ■各種軽合金の採用による自転車最大のポイント＝10.1kgの超軽量実現 ■脚力が高能率に伝わる外装12段パンタグラフ式サンプレックス製ギヤ ■軽い力で大きな制動力を発揮するマファック製センタープルキャリパーブレーキと軽くて錆ないスーパーチャンピオン製軽合金リム ■世界で屈指のウォルバー製タイヤとロードグリップの確かな独自のブロックパターン ■ぴたりとフィットするイディアル製の安定したサドル ■タイヤ交換、車体補修に車輪の着脱が容易に行なえるサンプレックス製クィックレリーズのハブ——など特徴はいっぱい。プジョー専用のボトル付で、車体色はプジョーの色、ホワイトでさっそうと登場です。

若さが映える

YAMAHAワシマーク長袖シャツ

丈夫で、永持ち、色あせがなく、スマートさで評判のワシマーク長袖シャツに、若さをひき立てるホワイトカラーが加わりました。

これでワシマーク長袖シャツは、ホワイト、ブルー、イエロー、グリーン、ブラウン、レッドと6色がそろったわけです。いずれも生地はコットン100%、ハイ・ネック、フリーサイズで、どなたにも気楽に着用していただけます。ヤマハのゆたかな商品群と合わせ、どうぞお店でもすすんでお取扱いください。ご注文は担当のセールスマンがお伺い致します。

ヤマハニュース11月号・昭和48年11月1日発行・発行所：ヤマハ発動機株式会社＝〒438・静岡県磐田市新貝2500・発行人：小池久雄